

# 白鳥事件と北大

— 高安知彦氏に聞く —

今 西 一  
河 野 民 雄

## はじめに

代表的な民衆思想史研究者の鹿野政直氏は、自分自信を民衆意識の「濾過者」として位置づけている。「日常の積み重ねのなかで、声を挙げられないままに沈殿している歴史の位相があり、それを一人ひとりの次元において掻き出すことは、その本来的な任務とする。顕在化しなかったことは、必ずしも存在しなかったことではない。聴きとりえなかったことが、それを存在しなかったこととする。その意味で歴史学専攻者は、存在を発掘するとともに、逆に存在の抹消者ともなりかねない運命を背負っている」と語っている（『民衆思想史の立場』『思想』第1043号、2011年6頁）。

私もまた、歴史学は社会の「濾過装置」だと考えて研究を続けている。若い頃に、畏友野田公夫と話していた時、私が民衆運動史を専攻したいと言ったら、彼は真面目に「あんな汚いことが、学問の対象になるのか」と言ったことがある。1968年以降の京大闘争に参加していた彼からすれば、学生運動の「暗部」をいやというほど見てきて、こんなものが学問の対象になるのか、というのが正直な感想であったろう。しかし、その「暗部」を含めて「濾過」する必要があるというのが、私の立場である。

鹿野が言うように、「歴史学のもつ過去への抑圧性・権力性」を最もよく示しているのが、1952年1月21日夜、当時札幌市警警備課長だった白鳥一雄警部が、自転車で帰宅途中、何者かによって背後から射殺された事件である。この犯人が佐藤博（通称ヒロ）というポンプ職人であり、これを推進したのが、北

大生を中心とした日本共産党の「中核自衛隊」（軍事組織は全国的に「Y」と呼ばれていた）であったことは、もはや明確になっており、松本清張氏の『日本の黒い霧』などに書かれているような権力の陰謀説や、村上国治の「冤罪」説が成り立たないことは明らかになってきている。

今年は、白鳥事件の60周年にあたり、4月14日、明治大学リバティータワーで、渡部富哉氏の「裁判資料から検証する白鳥事件」、中野徹三氏の「白鳥事件—その真実と責任を問う」という二つの講演が行われ、第二部では高安知彦ら3人の証言があり、翌15日には、志田重男氏の遺稿集をまとめられた渡辺照子の聞き取りの会も催された。私は残念ながら先約があって、15日の会には参加できなかったが、後日、渡辺氏の職場である大阪海員クラブ兼岩井会の事務所を訪れて、共産党の関西地方委員会の話を聞き、徳田球一らの北京機関についても、いろいろと教えられた。海員クラブという所は、船乗りの人たちの労働組合であるから、志田氏らが指導していた密出入国の機関である「人民艦隊」の中心であり、その経験者がゴロゴロいた所であった。

14日の集会の成果のひとつは、渡部氏による当時の共産党札幌地区委員（学生対策部）の一人であった、<sup>おいだいらやすよし</sup>追平 雍嘉（通称オPPER）氏の『手記』（より正確に言えば、追平の『手記』は後述しているように別にあり、『参考人供述調書』とするのが正しい。追平の『調書』は『手記』や供述をもとに、安倍治夫検事の手でまとめられたものである）を発見し、公刊したことである（社会運動資料センター、東京都三鷹市上連雀5-12-7、TEL 0422 (48) 3841）。長野県の司法博物館が所蔵している白鳥裁判の資料を、渡部氏は1年半にわたってボランティアで整理し、そのなかで発見したのである。

ただ追平氏は、共産党の専従職員ではあっても、軍事部門には直接タッチしていなかった。従って軍事部門の記録には誤りも多く、むしろ彼の『手記』は、イールズ闘争など当時の北大の学生運動の裏面を知る貴重な記録となる。まず最初に、『追平手記』（以下『調書』）から見えてくる北大のイールズ闘争や白鳥事件の内実を紹介しよう。

## 1 追平の生い立ちと北大共産党

追平は、1921年11月11日、埼玉県の川口町（現在は市）に、父追平春（春水）と母初子との間に次男として生まれた。二男二女の兄弟姉妹であつが、長男の雍信は戦死し、2、3歳の頃、東京都北区王子町に引っ越した。父春は病院に勤務する傍ら薬局を経営していた。追平はキリスト教会の幼稚園に通い、小学校は王子第二に行った。「ガキ大将に近い方」で、喧嘩は強かったと語っている。ただ中学校の受験が近づくと、外で遊ばないようになり、家の中で『小学生全集』を手あたり次第に読んだそうである。

東京市立第二中学校に入ると、山歩きやスキーが好きになり、勉強は3年の担任とソリがあわなかつたので、下がっていった。そのため4年の時に、第四高等学校（現金沢大学）の試験を受けるが落とされ、翌5年に北海道帝国大学の予科に合格して、面目をほどこした。1942年3月、北大の予科に入学して寮に入るが、「他の寮生のズーズーしさとあつかましさをばかりが目について、入寮第1日目の晩にはもう出たくてしょうがなかつた」と語っている。予科1年生の試験の時、大勢のカンニング事件が起こり、その嫌疑がかけられて、教師への不信を強め、「落第」を決めて山岳部に入って、山登りに熱中した。2年目からは寮を出て、下宿生活をしている。ここでは、追平の「人見知り」の激しさがよく表れている。

予科の時代は、登山関係の本ばかり読んでいたが、卒業の年に、長野県の野尻湖の友人の家に遊びに行った時、その友人の兄から天皇制や神代について、「自分の小学時代と本質的に変わらない知識を暗に壊され」て、ショックを受けている。予科を出て農学部畜産学科製造科に入学を希望したが、文部省は同科の入営延期の廃止を決めていたので、予科の宇野教授に呼び出されて、無理やり特別幹部候補生の試験を受けさせられた。しかし、面接でしぼられ、北大から受けた者は全員不合格であつた。この頃は、友人たちと「何のために死ぬのか」という議論をしていた。札幌の食糧事情も悪化してきたので、東京に帰って入営を待ったが、空襲で王子の市役所が焼かれ、追平の現役兵証書も燃えて、兵隊には行かずに敗戦を迎えた。

この間、カール・ビューハーの『国民経済学』を読んだが、批判されているマルクスの方が、彼よりは正しいと感じたが、マルクス主義の本を読んだことはなかった。葉山嘉樹のプロレタリア文学を愛読していた。敗戦後、東京の古本屋で『共産党宣言』を買って、家に帰る電車のなかで夢中になって読み、『学生運動史』やブハーリンの『史的唯物論』を買ったのを覚えている。「何のために死ぬのか」という呪縛からマルクス主義によって解放され、戦犯追放という記事に扇動されて入党の決意をしたという。その時、共産党の東京都委員会の常任に入党する前からなっていて働いていた。これには党本部も慌てて、46年の2月か3月に正式に入党した。同年8月に党科学技術部（S・T）が、野坂参三らによって作られ、その書記となった。この頃、学生運動も盛んになったので、10月頃に本部の常任を辞めて、北大に戻ったが、「当時の北大細胞は、山田吉澄ら10名に満たなかった」と語っている。

北大では燃料獲得闘争を組織するが、冬には放り出して上京した。党本部の科学技術部の仕事を手伝うが、これも2・1ストの挫折後、47年3月末の札幌に戻り、4月から法文学部政治学科に転部して、2、3カ月、共産党札幌地区委員会の地区委員をやるが、さっぱり仕事をしないので、3カ月ほどで首になった。当時の地区委員長は大川信夫であった。同年6月から北大では法文学部の講義が始まり、各学部の学友会を、自治会に改組する運動を行うが、うまく行かなかった。ところが、翌48年春までに、法文学部自治会を強固にして、理学部自治会と提携して、学園復興の映画会などをやり、自治会連合をつくった。同年3月、山田らが卒業して、追平がキャップになると、文部省は授業料の3倍値上げを出してくるが、6月、北大の各自治会は、授業料の不払い決議を行い、6月21日、北大全学が1日ストに入った。この6・21闘争以後、「多くの入党者をむかえ」、追平は「細胞の指導を中井明（キャップ）、福田豊彦、野村謙三らに引つぐが、ストの後の闘争は下火になってしまった」と語っている。

この頃、追平は、北労会議にあった産業別復興会議北海道支部の書記になって、ほとんど学校に行かなくなっていた。ただ産業別復興会議は、開店休業状態になっており、翌47年2月には解散し、そのまま北労会議の調査部に引き継

がれていった。しかし、同年3月、吉田四郎が共産党の関西地方委員会からやってくると、「全党は急激に活発になってきた」。当時の北大細胞では、野坂参三や武谷三男の「技術論、インテリ論」が隆盛であり、「学生時代はブルジョア科学を摂取する時代である」という主張が、理学部の研究者、学生によって出されていた。これに対して、追平たちは「学校細胞が従来の同学会的性格から、次第に革命の同盟軍としての学生、インテリを如何に本来の強化支援に動員し、組織するか」という立て直しにかかった。

しかし、この対立は深刻で、北大の細胞は解散の直前までいった。そこで3日間にわたる細胞総会が持たれ、この総会には杉之原舜一や太田嘉四夫ら北大の教官も参加し、約30名が集まった。結論としては、「現在は党を解散すべき時ではなくて、強化すべき時である」ということに落ち着き、追平らを新指導部として選んだ。しかし、追平は同年夏から北大を離れて空知地方の三笠地区委員会にアカハタの支局長として配属されるが、北大で杉之原教授の首切りが問題になると、着任3日で北大に戻された。この首切りはたいしたこともなく収まったが、49年12月、労働者への啓蒙活動を強化するための北海自由学園を杉之原校長で実現しようという計画が持ち上がったが、50年1月のコミンフォルムの日本共産党批判によって、党内の分裂騒ぎに時間をとられ、この計画は消滅してしまった。

## 2 北大イールズ闘争と共産党

1950年3月の卒業を契機に、追平は東京に帰ろうか考えるが、吉田四郎に暫く地方の学生対策をやるようにと言われて、学対部長になる。この時、GHQの民間情報局(CIE)の高等教育顧問という肩書きで、イールズが全国の大学を「アカ教授追放」という反共演説にまわっていた。5月2日には、東北大学で反イールズ闘争が盛り上がり、同月15、16日には、北大に来ることになっていた。

追平たちは、「イールズ闘争の本質は、イールズの言行に対する一大奮起を組織して、全国民に日本の植民地化の事実、民族の独立を勝ちとらねばなら

ぬことを知らせることである」と考え、「まず聞いてみよう。ほんとうに悪ければその時追い払えばよいではないか」と思い、「まず学生に講義を聞かせることにきめた」。第1日目は、イールズの講演は、「学生、教授の嘲笑と怒りの中に終り、伊藤（誠哉）学長はイールズの面前で学生に」、「思想問題だけで首切ることは絶対にやらぬ」と言って、全員の「大喝采」を受けていた。

第2日目は、学生の質問を認めていたイールズが、くだらない話をつくくわえて講演を延ばしたから、学生は「足高く帰ったり、あっちこっちで大声で話を始めて場内は」騒然とした。「この時吉田四郎は追平に」、「どうするんだ、大丈夫か」と言うから、「大丈夫だ」と答えている。この時に追平は、「学生の質問事項の一問一答を約束通り行わせる必要を痛感し」、「主な細胞員を場外によんで、司会者の松浦（一）教授を通じて、是非イールズが自ら約束を実行するようにたのんだ」。「この時非党員の学生委員も集まって来たので、全員が壇へ上って松浦さんに交渉する者、下に残っていざという時に備える者をわけて、再び会場に入った」。しかし、学生たちはなかなか立ち上がって交渉には行かなかったが、「閉会5分前になって先ず高岡（健次郎）らしい者がスルスルと席をはなれ続いて志村（哲良）、梁田（政方）と次々と立ち上がるや会場一ぱいの学生は歓喜の声をあげ、大拍手でこれに答えていた」。

「突然の拍手と歓声に何を勘違いしたのか松浦さんはイールズの話の打ち切らせて、本日の講演は終わりました、と閉会を告げ、結果的に学生の要求を潰してしまった」と追平は書いている。しかし、この時の松浦の判断は正しく、もし「閉会」を宣言せずに、学生が演壇を占拠してしまえば、より大量の処分者を出すことになっただろう。松浦は、この時は非党員であったが、日本ミチュエリン学会の会長なども務めており、共産党の有力なシンパ（同調者）であったが、この時に学生が演壇に上がってきたことには、強い不信感を持っていたという。

その後も、会場は大混乱であったが、「追平が会場の中央講堂へ正面の方から入って行ったら、丁度伊藤総長がアタフタと出て来る処で、追平を話を聞きに来ていた他の学校の先生と間違えたらしく、「農学部5階の中講堂で話をつづけますから」と教えて呉れた」。「追平は直ちにこれを学生実行委員会に連

絡、総長のあとを追って2千人を越えた教授、学生、職員で農学部へ押しかけた。この為総長は農学部4階の螺旋階段で学生の捕虜になり(直ちに放免)、イールズは講堂の中側より鍵をかけて震える始末であったが、学生側はその儘解散した」。しかし、この翌日にもCICによる学生の不当逮捕があったが、学生側とCIC隊長との直接交渉で「全員釈放」されている。

そもそもイールズ闘争の始まる前から、イールズに講演をさせるという追平と、イールズ講演そのものを認めない吉田との間に、意見対立があったようである。また、イールズ闘争の1カ月後、4名の退学者を含む10名の学生が処分されるが、この処分撤回闘争ができなかった理由を、追平は「当時の道地方委の宮川寅雄の裏切り」によって、ストが内部から崩れたと言っている。だが、むしろ当時の全学連が所感派と国際派に分裂していて、統一行動がとれなかったことが大きな問題であろう。イールズ闘争によって「多分20名くらいの入党者を獲得」するが、処分された学生などを、後述する非合法活動などにまわして、大学での闘争を二次としたことも、大きな敗因であったと考えられる(拙稿「北大・イールズ闘争から白鳥事件まで」『商学討究』第61巻4号、2011年、参照)。

また北大イールズ闘争の従来の研究(梁田政方編『北大のイールズ闘争』光陽出版社、2006年、他)では、なぜかこの共産党の「指導」があったことが隠されており、そこが東北大学のイールズ闘争研究(大藤修『検証イールズ事件』清文堂出版、2010年、他)との大きな違いになっている。ここにも白鳥事件の暗い影があるのかもしれない。

### 3 軍事方針と白鳥事件

追平は、この後50年の6月末には、北大イールズ闘争で出来た「活動家」らを連れて芦別地区委員会に入り、一カ月程してから地区委員長になる。そして翌51年6月からは広島県の呉地区委員会に移るが、体をこわして札幌に戻り、札幌地区委員会の常任になる。翌52年の3月か4月頃、党中央の指示で札幌のビューローの所属になる。ここで取り組んだのが、赤平での前進座公演の防衛

であった。しかし、51年2月23日から27日にいたる、共産党の臨時中央委員会、第4回全国協議会（4全協）、10月16日から17日までの第5回全国協議会（5全協）が持たれ、51年綱領と軍事方針が確定する。

同年10月20日頃、村上国治が札幌委員会委員長になるが、この時に軍事委員会が結成され、村上自身が委員長になる。軍事委員会は、追平の供述によって山口隆巡査が作った図1によると、花井（宍戸均）とミチ（鶴田倫哉）が指導部で、「技術」に植野光彦、「防衛」に辛昌錫、「特殊任務」にヒロ（佐藤博）がなったとなっている。軍事委員会の副委員長格で中核自衛隊の隊長には宍戸均がなり、鶴田倫也（ミチ）、大林昇（ガサ）、門脇成、辛、佐藤の名前があがっており、「坂井」という人物の名前もあがっているが、これは農学部の学生坂井義のことであろう。「？」をつけているのは、追平も彼が中核自衛隊員であったかどうか自信がなかったのでであろうが、坂井は中自ではなかった。辛も軍事委員や中自でないのに名前があがっている。

ここにも、追平の軍事委員会の知識のアイマイさが見られるが、「在日」朝鮮人の辛を入れるのは、彼の朝鮮問題認識の甘さを示している。辛は有罪で強制送還されれば死刑である。しかし、この他に高安知彦、村手宏光らがいたのに、ここでは入っていない（彼らの逮捕前に作られた図である）。ここでは隊長の宍戸が全通の労働者で、佐藤はポンプ職人であるが、それ以外は北大生になっている。しかし、検察の調べでは、他に山崎治夫、有岡襄、背戸田光治、石川正止郎らがいる（白鳥事件対策委員会『白鳥事件公判記録』第3集、1957年）。追平の『調書』では、中自＝北大生というイメージが強くなる。このことは軍事委員会は独立組織であり、非合法の札幌地区委員会の「K」（村上国治）の直属機関であって、追平にはほとんど情報は知らされていなかったことを裏付けている。

軍事行動の最初は、同年12月の石炭列車を止めた、「赤ランプ事件」である。札幌の近郊で3回、列車を止めて石炭を奪おうとするが、ことごとく失敗している。この闘争には高校生党員も参加している。また12月24日には、「パンパン屋及びパンパンの住んでいる家を見つけ、その家の窓ガラスをパチンコで



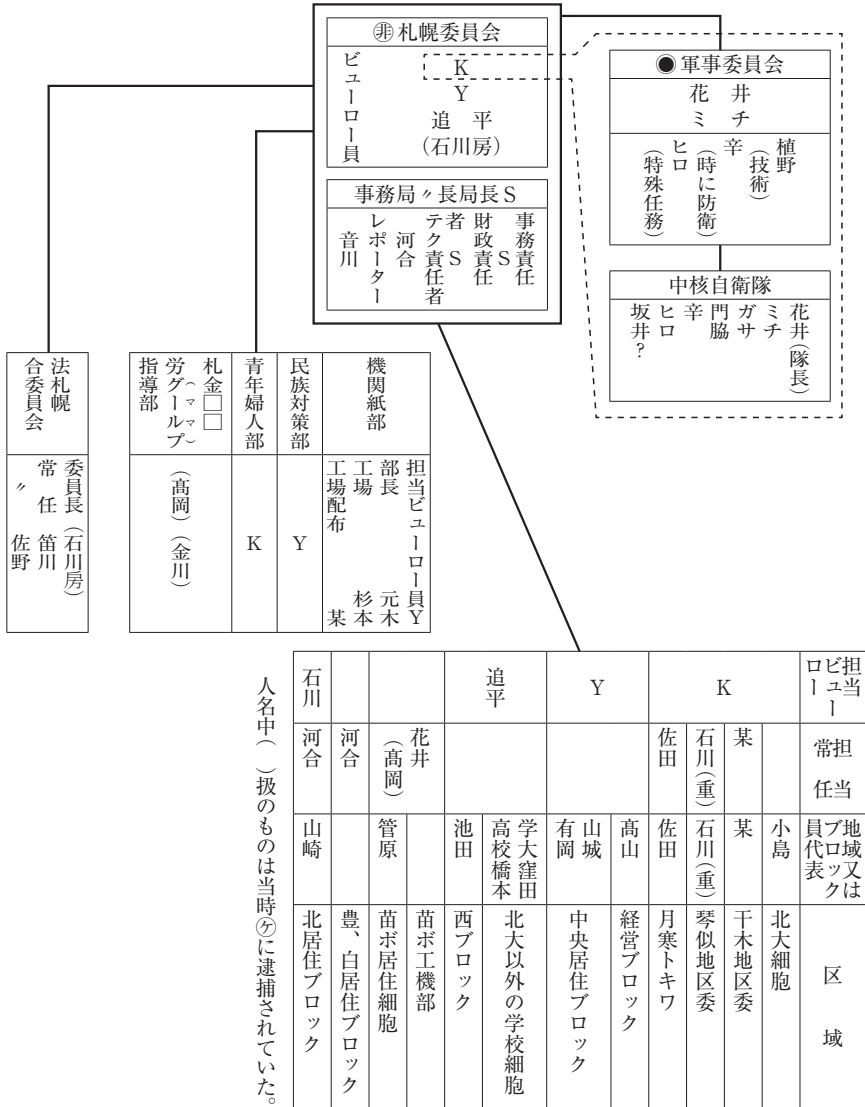


図 1 白鳥事件当時の共産党札幌委員会の組織図

出典：渡辺富哉編『追平擁護手記（「参考人供述調書」）』社会運動資料センター，2012年，86頁。尚，この図は，追平氏の供述をもとに，山口隆巡査が書いたものである。（高安知彦氏の御教示による）

こわして、直接彼等の反省を求める」行動を組織している。軍事訓練としては、12月下旬から札幌郊外の山中で射撃訓練を行い、手榴弾も実験している。

12月の末には、中山良三の道庁前ビラマキ逮捕事件への抗議ハガキ運動は、高田市長、小松本部長、白鳥課長、塩谷検事に宛てたものであったが、どうせなら「共産党取締の御大」白鳥課長に集中するようになってきた。この頃から「白鳥個人」について、「彼が満州で特務機関か何か、要するに対共任務についていたこと、約2年間の空白がある」こと。「薄野の飲み屋では、何んとかいう名前で通っており、幅をきかせていた。奥さんが二度目で、前の奥さんの妹だとかで、其の奥さんは姉である第一の奥さんの死ぬ前から妾のようになっており、白鳥は奥さんの死んで三月もたたないうちに再婚した。非常に活くらしが裕福で、近所でも変だ、変だと言われ、評判も悪かった」という噂が流れている。白鳥が、ハルビンで警察官をしていた時に、ハルビン学院でロシア語を学び、諜報活動をしていたことが暴露され、この時点でターゲットが白鳥警部に絞られていった。また51年12月26日、東京都の練馬区旭町駐在所で、印藤巡査が何者かに殺された、「練馬事件」が起こった時、村上是「東京に先にやられた」と追平につぶやいたそうである。

翌52年の1月初旬に、村上是白鳥課長の暗殺を、中核自衛隊に命令している。実行犯は佐藤博で、21日午後7時42分頃、自転車で自宅への帰途にあった白鳥課長が、後ろからついてきた男に狙撃され、即死している。この日、追平は佐藤をつかまえて次のような会話をしている。「どうしたんだ」「何発うったんだ」ときくと、ヒロは「引きがねを引いたが2発しか出なかった」と答えている。この会話については、何度も白鳥裁判で「虚偽」説がたたかわされている。佐藤の家には、『裏切られたフランスより立上ったフランス』（三一書房）という、第二次世界大戦中、ソビエトにあって自由フランス放送で、ナチへの抵抗をフランス国民に訴えた本が置いてあった。佐藤は、自分をレジスタンスの英雄のように夢見ていたのであろう。

事件後は、翌23日朝には、有名な「天誅下る（降る）」という「天誅ビラ」が各地でまかれる。このビラが、「下る」と「降る」と表記の異なるものがある。

印刷所も違うと考えられることは、渡部富哉も指摘しているように、ひとつは警察の手によって刷り増しされた可能性がある。しかし、共産党の北海道委員会代表の村上由<sup>ゆかり</sup>は、1月23日、このビラを共産党が出したことを否定し、次のように語っている。

今度の白鳥事件で警察はあたかも日共がやったかのような印象を与えているが、これは党員ばかりでなく一般市民にとっても迷惑な話で、党としてはこれについては一両日中に抗議声明を発表するとともに、その真相究明のための調査団をつくるように提唱したいと考えている

また、札幌委員会がまいたビラについては地方委員会としては何も聞いていないので責任ある言明はできないが、ビラの文句をみると全く政治性のないチンプンカンプンなもので、こんあものを党が出すかどうかは疑問だ。(『北海タイムス』1月24日付)

第一天ちゅうを下すなんて言葉はわれわれの辞書にはない、文面はまるで右翼張りだ、しかし札幌委員会のことについては一切知らない、同委員会は同じ建築物内で4名いるが全部留守のはずだ、われわれ地方委員会では2、3日中に別な声明を出してデッチ上ということをはっきりさせたい、他の人ならともかく札幌委員会の名であるならちょっとおかしいと思うからだ、調査団をつくり真相を調べるつもりだ、はなはだ迷惑だ。(『北海日日新聞』1月24日付)

しかし、1月24日の村上由が発表した道委員会声明は、若干ニュアンスが異なっている。

日共は個人的テロ行為は絶対やらない、しかし今日の日本は外国の帝国主義の手先となっている吉田政府が売国的ファッショ政策を行い国民の生活が破綻にひんし、自由を守る闘いは残虐なる弾圧の下に置かれている、このファッショと官憲の暴虐と独占資本の圧力に対し現在全国的に国民の無数の抵抗運動が起きている、今回の白鳥事件は実にこの全国的抵抗運動の一つのあらわれとみるべきである、白鳥氏の今日までの行動は全市民周知の通り全く労働者の生活をふみにじりファッショ的弾圧に終始している、このような

基本的<sup>マア</sup>の事件をふみにじる野獣のような行動に対しては、国民の自由と独立を守るため断固実力を以ってしても反撃しなければならぬし、またかく闘うことが愛国的行動といわねばならない、したがって犯人は他にあるのではなく、白鳥氏自身のファッション行動自身にあるべきだと思う。(『北海日日新聞』1月25日付)

白鳥課長やその後の警察の強権的な捜査に、批判の重点は移っていくのである。まるで白鳥事件を肯定しているような談話だが、共産党の犯行は否定している。しかし、一度ついた嘘は、それを守るために無数の嘘をついていかなければならない。首謀者の佐藤、鶴田、宍戸など10名の人たちは中国に亡命し、事件に直接関係なかった川口<sup>よしお</sup>孝夫まで、「知りすぎた男」として55年に中国に送られている。この闇に葬ろうとしてきた白鳥事件の真相が、社会運動資料センターや中野、河野らによって明らかにされてきている。その一端を紹介するのが、本稿の目的である。

## おわりに

白鳥事件の経緯については、以上のように新史料の発見もあって、かなり詳細にわかってきている。しかし、研究の対象としてはまだ不明な点も多い。まず共産党の4全協、5全協の軍事方針と51年綱領を忠実に実践したのが、白鳥事件であるが、この軍事方針とコムンホルン、また朝鮮戦争との関連も、まだ充分には解明されていない。中核自衛隊の人びとは、朝鮮戦争下の国内革命戦争、バルチザンとして闘うという意識だっただろうが、まったく民衆から遊離した幻想にしかならなかった。この誤りを第一に解明する必要があるのではないだろうか。

また白鳥事件の犯人の内、中国に亡命して行った人達は、静岡県の焼津港から日本共産党の「人民艦隊」によって上海に送られ、その後北京の徳田機関に行って、北京学校で保護されている。当時、この北京学校で「白鳥事件」のグループと会った犬丸義一氏は、彼らは孤立した集団で、うかつに口が訊けなかったと語っている。この北京機関と白鳥事件の関係も調べる必要がある。

この間、高安氏に3回ほど会う機会があった。彼は、事件の後、逮捕まで北海道の各地に飛ばされ、援農などをして生活していたが、この農民の生活を体験するなかで、自分たちの革命ゴッコが、いかにチャチで馬鹿げたものであるかを知ったという。そして、札幌地裁の安倍治夫氏という「異色の」検事に会って、すべてを話す気になったと語ってくれた。しかし、その高安氏に対して、作家の松本清張氏や白鳥事件総合対策協議会（白対協）の人たちは、「日本のユダ」という罵声を浴びせてきた。60年間耐えてきた心情を、斉藤孝、故川口孝夫氏との共著で近く発表する予定である（『白鳥事件』五月書房刊行予定）。

私の白鳥事件についての教師は、高安知彦、中野徹三氏と河野民雄氏である。なかでも河野氏からは、詳細な事件関係者の話を教えてもらっている。河野氏は、長年北海道の公立高校の教師をやり、屯田兵や北大の学生運動史研究の大家である。既に『「治安維持法」下の北大の抵抗運動』（自費出版、2008年）という労作があり、その戦後版を書くために白鳥事件を研究している。その気さくな人柄もあって、何かとお世話になっている。今回は、彼の高安氏への聴き取りを、是非、公開したいと考えて共著という形をとった。実に貴重な仕事である。

（今西 一）

## 高安知彦さんに聞く

### はじめに

高安さんを知ったきっかけは2010年5月16日、北大学術交流会館で開かれた「イールズ闘争60年・安保闘争50年の研究集会」の2次会の時であった。世話人であった私は、先輩方の写真をたくさん撮って名前の分かる方に送った。その時点では、高安さんがその席にいたことを知らなかった。その後、中野徹三さんの家でおしゃべりする機会があり、たまたま余った写真を持参して、名前の分からない人が1人いるので尋ねたところ、それが高安さんであることを知った。

高安さんが学生時代に白鳥事件に関与していたことは、聞きかじりで知っていたので、中野さんを通じて写真を渡していただいた。是非一度お会いして昔の話を伺いたい旨伝えていただいたところ、快く応じていただき、同年8月10日に中野宅で4時間以上に及んで話を伺うことが出来た。

その後しばらくご無沙汰していたが、11年10月22日、北大近くのクリスチャン・センターで開かれた、HBCラジオの白鳥事件を主題にしたドキュメントを聴く集会で偶然お会いして、また会いましょうと約束し合った。そして同年11月14日、中野さんの手配で札幌学院大の社会連携センターで、メンバーも少し増やして高安さんのお話を再度聞く機会が生まれた。この記録は、中野宅で河野が聞いた話を中心に、前記の別の機会に聞いた話も若干付け加えて文字に起こしたものである。

ナマの声を伝えたい部分は、出来るだけ忠実に復元したつもりだが、話し言葉の集録なので、文章化に当たっては適宜言葉を補ったり、要旨を記した部分もあることをお断りしておきたい。最後になりましたが、長時間にわたり聴取に応じて下さった高安さん、お世話いただいた中野徹三さんに感謝申し上げます。(2011年12月、編集者・河野民雄)

### 補遺

テープを文字に起こしたのは昨年の11月頃である。それを高安さんに見ていただいで確認するのに大分時間を要した。ごく最近になって折角の機会だから補足しておきたいことが幾つかあるのに気づいた。それで、直接お会いして確認した話も付け加えることにした。(2012年3月)

### 大学入学の頃

河野—高安さんに関しては、既に和多田進さんの聞き取り(『白鳥事件』新風社)がなされておりますので、なるべくダブリを避けるため、主として河野が質問する形で進めさせていただきますので、よろしくお願い致します。

高安—和多田氏とは面白い縁なのです。今から60年ほど前私の女房が帯広の営林局の寮で働いておりました。その時和多田氏のお父さんが寮の賄いをやっ

てまして、小さかった息子さんを「進ちゃん」と呼んでいた仲だったのです。和多田さんは山田清三郎さんの『白鳥事件』の復刻版を出すために、解説を頼まれていたんです。頼まれた和多田さんは解説に何を書いてよいか迷っていたらしいのです。

その時、知人の別用につれだって、全くの偶然に私のところを訪ねて来て、表札を見たら高安とあるので、あの白鳥事件に関係のある高安かなと思って玄関に入ったら、応対に出た家内と顔を合わせて、「進ちゃん」じゃないかということになったのです。帯広以来、数十年ぶりの再会でした。

それが機縁で、2日間インタビューに応じました。原稿のまとめを急いでいたらしく、小さな間違いもあったのですが訂正する間もなく発表されました。まあ、大筋においてはあの通りです。

**河野**—それでは早速お聞きしますが、大学に入ったのは何年ですか

**高安**—1950年です。余市高校を卒業して、一浪して入りました。高校時代は受験勉強が大嫌いで、山ばかり歩いてました。良い先生がいてその先生の影響もあって生物学にこってまして、山登りというよりは植物採集が好きでした。大学に行くなら身近な北大ということで、1年浪人して入ったのです。中野さんとは学年では1年違いで、1年遅れて入ったぼくとは年齢は同じなはずです。

**河野**—お父さんは余市の歯医者さんだったそうですが、兄弟は何人でしたか。

**高安**—男3人、女3人でした。ぼくは長男でした。ぼくの親父は歯医者でしたが、好きでなったのではなかったのです。親父は獣医になりたかったらしいのですが、九大で教授をやっていた叔父が学費を出してやるから歯医者になれといわれ、当時の歯科医専に入ったのです。そんなもんだから、ぼくらには歯医者になって後を継げなどと一言も言わず、好きなようにせいという感じで何の束縛もありませんでした。

**河野**—当時は余市高校から北大にたくさん入りましたか。

**高安**—あの当時は結構たくさん入りましたよ。一部の金持ちの子は小樽の中学に行きましたが、大部分は地元に残り、あの当時2クラス百名で浪人も含めて10人くらいは受かっていました。

河野—和多田さんの本を読むと、大学に入って期待はずれでがっかりしたようですが。

高安—初めは張り切ってアカデミックなものに憧れて入ったのですが、大講堂でのマイクの授業などではがっかりしました。教養では教授と個人的つながりもなくもの足りなく感じていた矢先に、イールズ問題が起きたわけです。

ぼくは高校時代、党には入っておりませんでしたし、特にそういうグループとの繋がりはありませんでした。ただ皮肉屋で批判精神は旺盛で、何かあれば学校の中で校長などに食って掛かるタイプで、勝手に自分ひとりでやってきました。

河野—高校時代生徒会の役員とかやりましたか。一般的に言うとキカナイ生徒だったのかな。

高安—生徒会とかは特に何もやってませんでした。普段は大人しいがしゃべり出すと止まらないところがありました。

### イールズ闘争への参加

河野—大学に入って間もない5月15、16日にイールズが来たわけですが、講演会には出ましたか。

高安—興味津津で両日とも参加していました。

河野—実は私は、イールズ講演の2日目を皆さんに思い出してもらっているのですが、記憶がまちまちでいまだ以って実態が把握できずにおります。当日の午後になってイールズが一方的に講演し、質問があったら英文にして出せということで、実行委員が一旦退席して再開します。その直後に合図のビラが下がったといわれるのですが、何か下がった記憶がありますか。

高安—ぼくは文言は思い出せないが、正面に向かって左から何か下がったように思います。1階の後方の左側に座っていて、左から下がったという印象があります。あの文面を作ったのは多分追平（雍嘉）氏、愛称オッペさんだと思います。彼は当日、一般職員を装って背広姿だったようです。ぼくはイールズ事件に関する本が出た時、彼がこの本の記述は違うなど言ったのを聞きました。



当時、オッペさんは党の北海道委員会の学対（学生対策）だったはずですよ。

**河野**—中野さんも当時の教養自治会の委員長で実行委員でもあった見沢（俊明）さんからそのことを聞いていたようですね。

**中野**—見沢君から聞いた話では、一旦中央講堂から下がって相談した時、そこに追平氏がいて「このまま帰してはならん。壇上で止めるんだ。お前やるか、お前はどうか」と一人ひとりに詰問した。見沢君は党員でもないのにそんなことを言われて反発を感じたと話してました。

**高安**—オッペさんのことは皆知っていたが、裏からの指導があったことは話さなかったのではないですか。

**河野**—大学が発表した処分理由書の中にも、下がった後の相談の時、その場の雰囲気や決定付ける人物がいたかの様な記述があります。固有名詞を出すともめるので、そんな記述になったのかもしれませんが。ピラに関しては、正面に向かって左手から下げたという人や演壇右手の小窓から下げたという人もいます。また、正面右手の2階から下がり、文面も覚えているという人もいて、ピラは複数下がった可能性があります。

追平氏の経歴は彼が書いた『白鳥事件』の奥付に書かれていますが、それによると大正13年川口市生まれ、昭和21年共産党入党、党本部書記として勤務、25年法文学部政治学科卒業となっております。

**高安**—彼は初め農学部なはずですよ。戦後法文学部に移ったそうです。一時期東京の党本部に通って仕事を手伝ったが、間もなく学生は大学に帰れということで戻ったそうです。

**河野**—実行委員が演壇に向かった時、松浦（一）先生が中止を宣告してその場は学生大会のような形になりました。そのうち、大学教官らは農学部に移動していることが分かり、学生らが農学部を押しかけて多少混乱しました。これを避けて農学部前で集会が持たれました。この集会についても見解が分かれています。実は17日付けの『北大新聞』号外が出ております。それによると、一部の学生が批判的発言をして参加者からやじられた。また、遅れて学長や松浦先生も登場して発言したとあります。事件の詳細を書いた梁田（政方）さんは、

このことを否定してます。高安さんはこの集会を覚えてますか。

**高安**—農学部の螺旋階段まで追いかけた記憶はあるが、細かいことは思い出せないな。ああいう混乱した状況では、冷静に第三者的立場で見ていた新聞の記述のほうが信用できるんでないのかな。当時の新聞会がウソを書く理由もないしね。

**河野**—ほくもそのことを強調してますが、認めない方もいます。6月の後半に学生処分が発表されて、教養部では処分反対のストを決議しましたね。先日、和気（一民）さんから当時の理学部の様子を聞きました。理学部でも事件の直後には、一部の連中が騒ぎすぎて松浦先生を見殺しにしたという批判的意見が多くて、和気さんも辛い思いをした時期もあったようですが、やがて大方の学生は処分がきつすぎるという点で一致したようです。教養が処分反対のストをやろうとした時、理学部は先輩として反対して、体育館に巻紙に書いたアピール文を貼り出したそうです。

**中野**—いろんな学部からストはやめた方が良いという申し入れがあった様です。2日目の講演が中止になった後、農学部前で開かれた集会に松浦さんが、お前達は約束を守ってくれなかったと怒ったら、理学部の福田君なんかが、そんなことを言うのは学者らしくないと嘯み付いた記憶があります。その後で、私は学生の信頼を失ったので北大を辞めると掲示を出しました。それから数日して、中央講堂で自分の所信を表明する講演があり、それにほくも出た記憶があります。

**河野**—高安さんは松浦先生が中央講堂で、「学生に訴える」という演題で講演をしたのを覚えてますか。

**高安**—ほくは覚えてません。

**河野**—和気さんなんかも、松浦先生と学生の間で紳士協定があったといわれるが、双方で協定の内容の理解に食い違いがあり、松浦先生にしてみれば集会をうまく運用しようと思っていたのに、学生が血気にはやってやり過ぎて中止になったので、一時はかなりの怒りの感情を持っていたと見ているようです。

### 入党，そして中核自衛隊加入

河野—和多田さんの聞き取りによると，高安さんはイールズ事件後すぐには入党せず，平和を守る会に入ったんですね。入党はいつですか

高安—最初はストックホルム・アピールを広める活動などをやっていました。入学当時は単なる野次馬的學生でした。その後，民主青年団（民青）に入りました。

10月か11月頃入党しました。ぼくの推薦者は中島哲氏でした。彼は法経学部で中野さんと同期でした。彼の親父は北炭夕張鉱の所長という名門で，親に勘当されて家を出てしまいました。祖父の北大教授宮部金吾先生の桑園の家から通ってました。ある日，宮部老先生は心配して「哲はいませんか」と，トコトコと杖について社研の部屋に捜しに尋ねて来られました。ぼくは，生物学が好きだったので宮部大先生がどういう方か良く知っていたので，汚い社研の部屋でポロ椅子を出して，「とにかくお座り下さい」といった記憶があります。

河野—高安さんはどこの学部へ進んだのですか。

高安—ぼくは生物が好きで北大に入ったので，理学部か農学部の生物関係を考えてましたが，元来フィールドが好きで，研究室で顕微鏡を覗くタイプでなかったため，農学部の農業生物学科へ進みました。ところが，その学科に職組の委員長で共産党員の太田嘉四夫先生が講師でいることを初めて知りびっくりしました。ただし，当時ぼくは勉強より党活動に熱中したものでした。

河野—手元の北大関連の年表をご覧ください。和氣さんが『蒼空に梢つらねて』の中で，「イールズ闘争から原爆展へ」という追想を書いているように，51年はストックホルム・アピールの署名運動や原爆展のような地道な啓発活動が展開されている反面，後に極左冒険主義と評される過激な運動も密かに進んでいました。

高安—ぼくなんかは原爆展の時，「お前行って来い」といわれて函館や旭川に行ったように思います。

中野—ぼくは，札幌で手伝ったように思います。

河野—北大に軍事方針がもたらされたのはいつごろですか。

高安—五全協は51年10月なはずですから、その頃からでないですかね。ただ、文書で具体的方針が提示されたのは翌年の1月、白鳥事件前後で無かったかな。その意味では、村上（国治）氏は方針を先取りして中核自衛隊を結成したようです。

中野—51年の2月頃に四全協があり、その時から武力革命は提起されていたと思います。その時、新綱領の原案が出たはずですよ。

河野—北大でもそれをめぐって論議があったのですか。

中野—そういう議論を皆でする党ではなかったのです。

高安—だいたいその様な議論をしないのです。上の決定を実行するのみです。

河野—私のような者は、方針が出たら不十分でも内部で喧々諤々やるとばかり思っていました、全然そうではないのですね。

中野—ただし、あの新綱領草案というやつは、意見があれば出すことが出来ると聞いたので、ぼくはあわてて意見を纏めて提出しました。後で道委員会キャップの吉田四郎から聞いたところ、全国でわずか5名が意見を出したようでした。

河野—中野さんのお書きになったものを見ても、51年の秋から組織に裏と表が出来始め、昨日まで親しかった仲間が急によそよそしくなったり、姿を消したことが分かります。当時の年表を見ると、軍事アルバイト阻止闘争があったり、署名運動が起こったり、集会などで北大生が逮捕されたりしています。表と裏というのが何となく分かるようで、分からない部分もあって困ってます。

高安—大体、表だの裏だのといってもその役割分担の説明もなく、まして話し合いなど一切しないのです。上が勝手に決めてやっていただけですよ。

河野—さて、軍事の中心をなす5名の北大中核自衛隊に話を進めたいと思いますが、5名は誰が選んだのでしょうか。

高安—最初はぼくと門脇（戊）、村手（宏光）の3人が選ばれました。当時の細胞キャップは小島（正治）氏だから、彼と委員長の村上国治さんとで選んだと思ってます。このほかにも誰だったか名前は忘れたが、3名のほかにも1、2の候補も呼ばれて考える時間が与えられた結果、他の人は断りほくら3人が選ばれました。何日か後に3人が呼ばれて口頭で選ばれた旨伝えられました。

その時、中核自衛隊と呼んだか、またその場に国治さんがいたかどうかは、今となってははっきりしません。

一昨年、定山溪に昔の仲間が集まった時、小島氏に「あんたが中核自衛隊を選んだんだろうと」聞くと、「そんな昔のことは忘れたよ」とはぐらかされました。

村上さんは留萌委員会から札幌に出て来たばかりで、都会の一般会員にはなじみが薄くて入って行きにくいので、51年の11月頃から北大にささりこんで、社研の部屋に入りびたっていました。村上氏はしょっちゅう北大に来ていたので、誰が適任かについてある程度分かっていたのでしょう。公判では、10月末に札幌に来たばかりで西も東も分からず、北大では小島君がやっと分かる状態で、3人を選べるはずがないと主張したそうですが、最初はそうであったかもしれませんが、51年の暮れにかけてしばしば北大に来ていたので、ほくら以外の人でも村上さんの顔や名前は知っているくらいです。

北大の学生は暇だし、頭も良いのでこいつらを掌中に収めたかったらしいのです。それまでは北大学生細胞は道委員会の管轄だったのを村上さんは札幌委員会の直轄にしたらしいです。

最初3人だった中核自衛隊に、遅れて確か常任をやっていた大林（昇）さんが加わり、さらに既に北大に籍が無く、確か道委員会の常任だった鶴田（倫也）氏を吉田四郎委員長を口説いて引き抜いたらしく、この5人になったはずです。河野一労働者出身の宍戸均さんが隊長格になったのは何故でしょうか。

高安一多分村上氏あたりが、元気が良いということで初めから彼を軍事委員に選んだからでないですか。

佐藤博さんは52年の1月になって突如メンバーに加わりました。ほくの推測では、博さんは前の年の暮れから宍戸さんと拳銃の訓練をしていたように想像しています。

河野一5人の名前が出てきたところで、所属学部も教えてください。

高安一ほくは農学部生物学科、門脇は法経学部経済学科、村手は理学部地質学科、大林は法経学部経済学科、鶴田倫也さんは法経学部政治学科でした。鶴田

さんのお兄さんも法科の活動家で、後に弁護士になりました。

**河野**—高安さん達は、自分たちを中核自衛隊と呼んでましたか。

**高安**—最初からそう呼んでいたかどうかは分かりませんが、自分たちは軍事を担当する中核自衛隊だと思ってました。中核自衛隊も十分な論議も無いままに上からの命令で出来たので、村手君などは最初デモやビラ貼りの時の護衛くらいに軽く考えて入ったのではないかと、後に検事から聞きました。

**河野**—高安さんが中核自衛隊に選ばれた時には、どんなイメージでしたか。

**高安**—ぼくと門脇なんかは良く似ていて、血の気が多くて何でもパツとやる方なので、党の指名を喜んで受け入れました。村手は普段は大人しいのですが、血気にはやるというか活動的なころもあるので選ばれたのでしょうね。

**河野**—当時としたら、そういう指名を受けたら光栄だったのではないですか。

**高安**—そうなんです。白鳥事件とか軍事のことは、今から考えると馬鹿げた滑稽なことをやったと思われるかもしれません。でも、あの当時とすれば敗戦後のアメリカ占領下にあって、朝鮮戦争が始まって冷戦に火がつき、党員のわれわれに物凄いインパクトを与えて危機感が募りました。中野さんですら交番にビラまきに行行って捕まったのです。今から考えると馬鹿げているけど、そんなことをやった時代だったんですよ。その陰にはものすごいわれわれの危機感があったのです。60年代、70年代は危機感が薄れて行きますが、50年代はそういう時代だったとぼくは思ってます。

ですから、党が軍事方針を出し武力革命をやろうとしたのは、今から考えると滑稽ですが、そういう考えが生まれてくる状況があったのだと思います。何の理由も無く軍事方針が生まれたのではなく、今となっては間違っていたと思いますが、生まれるだけの情勢だったと思っています。

**河野**—自分たちの事を中核自衛隊だと思っていた様子ですが、実は10年ほど前に早稲田の卒業生たちが『早稲田1950年, 史料と証言』という本を出しました。彼らなりの50年問題を振り返った本です。それによると、早稲田などでは軍事組織をYと呼んでいたようです。その本によると、上からYに誘われた人がこう言われたそうです。「1に忠誠、2に体力、3、4が無くて5に度胸」「これ

からは目的のためには手段を選ばず、火付け、強盗、なんでもやる覚悟でのぞめ」。要するに党に忠実で血気盛んな度胸の座った人を選んだようです。

**高安**—少なくともぼくと門脇は血の気が多くて、頭が単純で深く考えずに行動するから選ばれたんでしょうね。

**河野**—高安さん自身が認めたから言うのではないですが、当時の北大新聞で高安さんらが何かを要求してハンストをやったという記事を見つけて、高安さんらの血気盛んなイメージを画いてました。

**高安**—あれは確か主要な目的は太田さんが白鳥事件の脅迫葉書で捕まり、それとは別に鶴田倫也氏が、いわゆる北大カメラ事件で逮捕されたのに抗議して、ぼくや他の仲間2、3人でやったのです。

**河野**—Yというのは当時を回想した書物や新聞にも出てきます。何故Yという隠語で呼んだかはわかりません。ところで、中核自衛隊に選ばれた宍戸さんなどは日常は何をやっていたんでしょうね。

**高安**—何をやっていたかはわかりません。多分、国治さんの下で軍事の実務をやっていたんでないでしょうか。5人で何かをやる時は宍戸氏が出てきたように思います。

**河野**—ところで、高安さんは最初北大学生細胞に属していたと思うのですが、中核自衛隊に入ってから北大学生細胞とは別の指揮、命令系統に属していたのでしょうか。

**高安**—そうだと思います。いわゆる白鳥事件が起こってしばらく経って、村上さんから中核自衛隊を発展的に解消するといわれて、北大細胞に戻されたように思います。その後も、特別な指示で動員されたこともあったように記憶しています。

## 赤ランプ事件

**河野**—51年暮れの赤ランプ事件などは、中核自衛隊がリーダーシップをとったのですか。

**高安**—そうでもないのです。中核自衛隊も中心メンバーでしたが、指揮をとっ

たのは宍戸氏でした。彼は、よくブローニングのピストルを持って歩いてました。

河野—赤ランプ事件は3回あったはずですが、その時は高安さんら中核自衛隊は必ず参加してましたか。

高安—中核自衛隊は、列車が止まった時、石炭車の側を開けて石炭をこぼす任務がありました。門脇君などと桑園あたりの石炭置き場に視察に行くと、貨車のハンドルの動かし方をこっそり研究しました。

河野—どの場所で列車を止める計画だったのですか。

高安—1回目は苗穂と札幌駅の間、2回目は同じ場所じゃまずいということで苗穂駅の先の白石、3回目はまた元に戻って苗穂と札幌の中間でした。3回とも失敗してしまいました。

河野—中核自衛隊以外にも参加した人がいたのでしょうか。そんな時、中野さんは何をしました。

中野—何も知りません。やったというのも後で聞いて知りました。

高安—中核自衛隊員以外には、民青の高校生や幌西や円山細胞の人たちも参加しました。彼らは、多分軍事要員ではなく、優秀な候補的な人として選ばれたのだと思います。しかし、ぼくたち5名を含む10数名の寄せ集めでした。ちゃんとした打ち合わせもなく、いい加減な行動でした。

河野—大体、どうしたら石炭貨車のどてっ腹が開くのかを知らないでやってるんですからね。

高安—一応、ぼくや門脇が下調べはしていたんですがね。

河野—この少し前、旭川から護送される朝鮮人奪還計画もあったようですが、北大の中核自衛隊も出動予定だったのですか。

高安—あれは上川委員会、空知委員会、札幌委員会の合同計画だったのです。列車が札幌駅に近づいたら、列車から飛び降りて奪還する予定だったようです。ところが計画が杜撰で、旭川出発の時間がこちらで察知した時間と変わったらしいのです。携帯電話もない時代だからそのことを電報で知らせて来たらしいのです。電報が着いた時には既に遅かったわけです。だから、北大生の出動予定



もあったのですが、出番なしでした。

それと、後で得た情報では、向こうもかなり警戒して、拳銃携行の刑務官が3人も護衛していたようで、もしドンパチが始まったら負けです。何しろこちらはブローニング1挺しかないんだから。

**中野**—ちょっと話が戻りますが、51年10月頃高安さんは入党したようですが、その頃はどこに所属してましたか。

**高安**—入党はしましたが、しばらくは民青員のままでした。ほくとかY先生のお嬢さん、S氏、Kさんなどがおり、教養班は確かB氏が統括してました。黨員だということは表に出さず、民青員だということで活動してました。

### 山村工作—表と裏の組織

**中野**—当時は党の基本的活動を学生の間でどう進めるかというよりは、もう既に遊撃隊的行動をやっていたようです。B氏から聞いた話では、追平氏の下でいろんな所の襲撃だとか、パンパン宿をパチンコで打ったり、反共映画のロケを妨害に行くとか、様々な行動を高校生と一緒にやらされ、彼も迷いながらやっていたといいます。

50年の後半か51年の初めの頃、それまでは同じ班の中では、曲がりなりにも話し合って任務分担を決め、少なくとも同じ班とか隣の班の人とはお互いに知り合っていて、話し合ったり勉強会をやっていました。ところがその後は、党に入ったのか入らないのか、こちらから話しかけても分からない。どこかに目に見えない壁が出来て二重になったようでした。例えば、門脇や桂川（良伸）君はほくと同じ中学の同級生で、会えばヤアヤアと言いつつ間柄だったのが、急によそよそしくなっていました。今になって考えると、彼らのその後の歩みから見て、われわれのような外から見ても分かる半公然活動をしている人間は除外して、割と党歴が浅くて目立たない人をピックアップして、そういう行動をさせたのではないかと思います。

**河野**—学部が違うので中野さんは、高安さんが何をやってたか知らないのではないですか。

中野—そうなんです。

高安—北大細胞でも学部が違うと全然分からないのです。全学集会などがあると自治会の中心的な人は活動家なので見当はつくが、ほくらみたいな者は分からないので裏に引っ張られてました。党が表と裏をどのように組織しているかなどは誰も分からないのです。

河野—私もある程度表と裏の区別はつきますが、軍事アルバイト阻止闘争は表の活動で、赤ランプ事件は裏活動ですよ。その辺の区分がまだ以って分からない事があります。この際聞いておきたいのは、山村工作隊についてです。私の作った年表では1951年12月20日頃、宍戸さんを隊長とする北大生5名と学芸大の藤井さんらが千歳へ、新本、坂井（義）の北大生のほか、柴田、橋本、赤石ら高校生が豊平の常盤へ山村工作に入ったとあります。その時北大の中核自衛隊も行ったのですか。

高安—行きました。12月末だったと思います。ほくらは千歳の阿字砂里、祝梅部落に行きました。

河野—何を工作しに行ったのですか。

高安—敗戦前、千歳には二つの飛行場がありました。その一つは現在の千歳空港ですが、もうひとつ駅の裏に予備の飛行場があり、それを一時アメリカが使用しました。その付近に戦後、開拓者が入ったのです。貧しい方が多く、家も三角の拝み小屋でした。千歳のあのあたりは火山灰地で、古い農家は川渕の土地の良い所に住んでいます。ところが、開拓者の住んでる所は厚い火山灰に覆われて、所々に黒土が挟まっている状態でした。

ブルドーザーも無い時代に、1メートルもある火山灰をひっくり返して黒土を出すのです。何を工作したか今になっては思い出せないのですが、多分火山灰掘り起こしの手伝いをしながら工作したように思います。

河野—私の調べでは20日に行って、27日に市役所座り込みで逮捕者が出たため、翌日帰れという指令が出たようです。

高安—そうでしたかね。約1週間いたのですね。ほくらは2、3日だったように思っていました。その間にどこで寝泊りして何をやっていたのか詳しいことが思

い出せません。

**河野**—私の調べでは、千歳には爆弾も持って行ったようですね。

**高安**—結局、中核自衛隊が農村工作をするということは、農村に軍事拠点を築くためだったのです。中国の革命の真似をして、農村に革命のための軍事拠点を作りに行ったのでしょうか。

**河野**—中核自衛隊が出来て、1～2ヶ月で山村工作に入ったのですね。

**高安**—中核自衛隊の結成直後は、大学構内で私服警官の侵入に備えてパトロールをしてました。千歳に出かける前には赤ランプ事件があり、千歳へは北大の中核自衛隊5名の全てが行きました。宍戸氏も行きましたが、彼は連絡係で常時行動を共にしていたわけではありません。

現在は札幌市内（当時は豊平町）になっている芸術の森のあたりにあった常盤部落に行ったのは、北大生の工学部学生新本、農学部農経の坂井、あとは高校生の3人だったそうです。あそこも戦後の開拓部落で貧しい農家ばかりだったようです。

### 投石から白鳥事件へ

**河野**—山村工作は、札幌市役所座り込み事件で大量の逮捕者が出たため短期間で終わり、急遽札幌に戻りました。その後は何をやりましたか。

**高安**—戻ってきて29日の夜、投石事件を引き起こしました。29日は確か昔の大通拘置所近くにあった塩谷検事の官舎に石を投げました。

**河野**—そういう時は、中核自衛隊の5人だけですか。

**高安**—そうです。それから1日おいて高田市長公宅に投石しました。大晦日の夜なら市長も家にいるだろうということでやったのです。あの当時市長公宅は北6条西20何丁目のあたりで、桑園の西の北円山にありました。この投石事件は後の市長の回顧録にも出て来ます。

**河野**—市長宅投石は12月31日の大晦日、公判記録などによると、明けて元旦に北学寮の大林昇さんの部屋で、白鳥警部殺害の謀議があったとされています。その期日については記憶もまちまちで裁判でもめました。

多分、私はある日集まって殺害について衆議一決といったことではなかったように思っています。和多田進さんの本に出てくる、オウムの信者のように指導者の黙示的な指示で、雰囲気が決まってしまったのかなと考えております。ただ、決定の中心には国治さんがいたと思われます。白鳥さんをやるために、事前に何か訓練をしていたのでしょうか。

**高安**—ぼくに関しては無しです。ほかの者は知りません。5人いたからといって、5人の全部が同じ事をいつもやっていたのではないのです。

**河野**—言ってみれば、個々人の情報交換は禁じられ一人一党だったからね。

**高安**—佐藤博などは、暮れのうちから何か訓練のようなことをやっていたらしいのです。それに宍戸も行ってたようです。宍戸と佐藤は何度も訓練的に拳銃を撃っていたんじゃないかと思っています。

ぼくらが撃ったのは訓練なんてものじゃなくて試射ですよ。拳銃に慣れるというか、ただ撃ってみる程度のものでしたのです。

**中野**—最初に国治が白鳥をやれと言ったのですか。

**高安**—千歳の工作から呼び戻された段階で、白鳥、市長、塩谷検事の3人をやるということを言っておりました。白鳥警部については年が明けてからゆっくり慎重にやるということで、やることは決まっていたのです。

**河野**—それで、年が明けると白鳥警部の身辺調査が始まったんですね。いつ最終的にやると決まったのかについては、今となってははっきりしない点もあるが、基本的には決める中心には国治さんがいたのは間違いないのでしょうか。

**高安**—そうなんです。白鳥警部をやるために動き出したのは年明けの4日だと思んですが、そのあたりのことがぼくにもはっきりしないのです。何せ暮れの12月から1月の初めにかけて、たいしたミーティングではないが、しょっちゅう集まって打ち合わせ的なことをやりました。その都度アジトの場所も変わるし、ぼくの中では場所と時間がこんがらがっていて、正直な話良く分からないのです。だから、ぼくの証言の中で門脇の所だったようにも思うし、良く考えると村手の下宿であったようにも思え、日にちもはっきりしないのです。それで、高安の証言はいいかげんで信用できないと弁護側から批判されるわけです。

検察側も最初は、こんな大きな事件を引き起こしていながら、はっきりせず記憶に残らないのはおかしいじゃないかと言うのです。

でもぼくらの間では、しょっ中白鳥をやるという話が出ていて、少なくともぼくら5人の間では自然にそういう雰囲気が出来ていました。急速にそういう機運が高まったので、それに対応する反省心も、ちょっと待てよという自制心もないわけです。

河野—51年の暮れから工作に行ったり戻ったり、しょっ中集まって白鳥が憎いと話し合っていたわけですね。

高安—白鳥がガンだという考えは大分前から出てました。北大生がたくさん彼に捕まっていますからね。特に軍事のことが出てきてからは、白鳥をやるという暗黙の合意みたいなものがあり、それに火がついたのが市役所座り込み逮捕事件だったのです。

中野—対警宣言は誰が書いたのかな。

高安—あれはぼくらで書いたんでなかったかな。鶴田さんが中心だったのかも知れません。元日のように思います。

中野—河野さんの年表では1月4日になってます。

高安—4日より前だったような気もするが、とにかく1月の初めには間違いないです。

河野—警察に対し、お前ら気をつけろよと警告したわけですね。

高安—そういうことです。あの中には白鳥始め、警備関係の3人ほどの警察幹部の名前がありました。でも、狙いは白鳥警部なのです。彼は集会やデモの時は、いつも自分が先頭になってやって来るので、党員の主だった者はあれが白鳥だと知れてました。それだけ名前が売れているのです。だから、あの当時の雰囲気では白鳥をやることは自然な気持ちでした。

河野—一年が明けて佐藤博さんも加わり、北大生5人とともに白鳥警部の身辺調査が始まったのです。1月の中旬頃例の事件の前、佐藤博さんが白鳥警部に向けて拳銃を発射したが弾が出なかったといわれますが、どうして彼が撃つたと分かったのですか。

高安—ぼくらは現場は見えていませんが、本人から弾が出なかったと聞いたので、ぼくと門脇らが拳銃をオーバーホールして調べたのです。

河野—こんな質問をしたのは、拳銃は1挺しかなく、しかも誰が持っているかは分からなかったと言われているので、何故ヒロさんが持っていると分かったか疑問に思ったからです。

高安—誰が持っているかは、ぼくらには分からないのです。だから薄々誰が持っているんでないかと想像するだけです。

河野—私などの推測では、国治さんは中核自衛隊員として北大生5人を選んだが、所詮は学生で頼りないから、もっと度胸のすわった奴ということで佐藤博さんを選んだように思います。

高安—国治さんにはもっと深慮遠謀があったと思ってます。実行犯は場合によってはもぐらせねばなりません。だから、もぐらせる人間とそうでない人間を使い分けたのです。人間の評価は頭の良し悪しだけでは決まらないのですが、言葉は良くないが学生は頭が良いし、度胸は労働者党員の方が良いので、長い目で見た使い道はどちらかという学生の方があるので、なるべくもぐらせたくない。だから、誰かにやらせるのだったら佐藤ヒロさんということになったのではないですか。

河野—悪い言い方をしたら、消耗品として使い良いからということになりますね。

高安—国治さんは、そういうことを考えた上での人選でなかったか、というのがぼくの推測です。

河野—高橋治という作家をご存知ですか。

高安—倫也氏の四高時代の同級生ですよ。事件後釈放されてからぼくの所へ何回も取材に来ました。もっと事件について突っ込んだことを書くのかと思っていたら、戯曲などを書いたのです。何かピントが狂ってるなと思ったものです。

河野—私は彼が『文春』に書いた「還って来た白鳥事件」という文章を読みました。それを読んで気付いたのですが、高安さんだって実際に白鳥さんをピス

トルで撃ったのは佐藤博さんだというのは、もちろん見ていないし、どなたからも聞いていませんよね。

高安—誰からも聞いていません。誰がやったかなどについては、軍事の担当者の間でしゃべらないのが鉄則です。誰がやったかなどは正式に話もしないし、聞きもしません。

### 追平氏をめぐって

河野—高橋さんは、結局佐藤博さんがやったというのは追平氏の証言以外にないということです。

高安—いやいや、追平氏だってやった所は直接見ていないんですよ。

河野—公判の記録では、事件が発生して犯人像が新聞で報じられたのを見て、犯人らしき人の風体が自分に似ているようなので、疑われたら困ると思ひ翌日佐藤博さんの所へ確かめに行ったようですね。

高安—翌日行ったといわれているが、どうも翌々日だったらしいのです。日にちが混乱していますが、印象深いことなので一旦そう思うとかえって思い込みになってしまうようで、ありうることだろうと思っています。オッベさんは軍事のことには詳しくないが、ヒロさんが軍事の方に引っぱられていることは知っていたようです。

オッベさんは当時、幌西や円山方面の細胞の指導をやっていたので、ヒロさんの性格なども良く知っているのです。ひょっとしたら彼がやったのではないかと思って、翌日か翌々日ヒロさんの所へ行って、ズバツと「お前やったんでないか」と言ったら、「よく分かったな」ということになったらしいのです。

オッベさんは、前からヒロさんの指導者だったので信頼し切っているのです。ペロツとしゃべっちゃったようです。誰にもしゃべってはいけない重大秘密なんだけど、ヒロさんも動揺していたのか、党员としてましてや軍事の要員としては問題なことをしゃべったのです。

追平氏が逮捕されてから追平手記なるものを自ら書いたのですが、白鳥事件との関連でいうと佐藤博さんから聞いたという部分だけが重大な意味を持つわ

けです。

河野—社会運動史の研究家の渡部富哉氏は、膨大な手記が残されていて、これにより事件の全貌が明らかになるかのように書いてますね。

高安—ほくは、渡部氏が言うほど事件の真相に迫るような資料価値は無いように思います。ただ別の観点から見るとあの中には、事件当時の北大や当時の共産党の動きが書かれており、事件と党との関係を知る状況証拠として、大いに参考にはなりますね。

河野—その点では、ほくのように戦後の北大の学生運動を調べている者には、学生や共産党の動向が分かり大変役に立ちます。ところで、追平さんが書いた『白鳥事件』という本は読みましたが、手記といわれるものはあれとは違うのですか。

高安—違います。結構長大なものだったようで、ほくはコピー機の無い時代だから写真に撮ったものを見せてもらった記憶があります。先ほども言ったようにオッペさんは、軍事のことや白鳥事件についてはそれほど知らないのです。ただ、佐藤ヒロさんに事件の直後に聞いたという点だけが事件と重大な関係があると見られたのです。実は、彼は逮捕される1年も前に事実上党を辞めていたんです。逮捕されて党を辞めてから自供したのではないのです。

オッペさんは、事件の直後空知委員会へ移りました。ところが、地区の運営がでたらめで給料も出ない状態に腹を立てて、任務を放棄して東京へ出て、通信社で働いているところを逮捕されたのです。脅迫葉書にからめて逮捕されたようです。

彼が護送されて札幌に着いた時に面白い話があります。東京警視庁から2人の刑事がついて来たが、丁度その時札幌駅が改装中で、手錠もされていない彼が刑事とはぐれてしまったのです。逃亡しても意味が無いと思い勝手の知れた中央署に行って待っていると、青い顔をして刑事が駆けつけオッペさんを見つけて、胸を撫で降ろしと聞いています。

オッペさんの取り調べに当たったのが、後ほど出てくる異色の安倍（治夫）検事だったのです。彼が検事に調べられるより俺が書くと言って残したのが、



いわゆる追平手記のようです。彼が書いたといわれる本は検事との合作ではないかと思っています。もしかしたら、最後の共産党批判のところだけ彼が書いたのかも知れません。オッペさんは札幌委員会の指導部にはいたが、軍事のことは専ら国治さんがやっていたので、副委員長の佐藤直道さんは多少知っていると思いますが、オッペさんは中核自衛隊の5人のメンバーすら想像で書いているだけです。だから、追平手記は渡部さんがいほどの物ではありません。

**河野**—ぼくは最近『追平供述調書』なるものを見る機会がありました。手記では証拠能力が弱いので検事が調べたものようですが、残念ながら肝心の事件の部分が無いのです。ところで、追平さんと高安さんは大分年齢も離れているようですが、どういう関係で知り合いになったのですか。

**高安**—ぼくは現在80歳で確かオッペさんは、ぼくより6歳上なはずです。だから、ぼくが大学に入った頃彼は卒業してました。イールズ闘争の時彼が裏で指導していた話なども、ずっと後になって聞きました。

ぼくがオッペさんと知り合うようになったのは、丁度下宿を探していた時に彼の奥さんの小野宅の空き部屋を紹介されてからです。奥さんの実家なので、党の会議のアジトとして貸したこともありました。ただ、ぼくは軍事に関することは口外することは厳禁なので話しませんでした。

彼が逮捕されて札幌に来てからは、個人的な付き合いもあってぼくを知っており、彼は党の活動を批判する立場になっていたので、ぼくの裁判の特別弁護人にもなってくれました。ぼくに非常に有利な弁護をしてくれたという印象はないのですが、もしかしたら彼は特別弁護人になって裁判資料を手に入れたかったのかもしれないとも考えております。数年前に彼の所在が分かり会いましたが、寄る年波で昔の記憶は薄れている様子です。

### 天誅ビラをめぐって

**河野**—事件の直後に出たいわゆる天誅ビラについて、幾つかお聞きします。和多田さんの聞き取りによるとビラは村上さんが作ったそうですね。

**高安**—国治さんが原稿を書きました。事件の翌日の22日午前だったように思い

ます。原稿を機関紙印刷に届けに行ったのはぼくでなかったと思いますが、夕方になって「お前校正に行け」ということで、校正に行きました。

河野—印刷所は今もある北大のすぐ南ですね。原稿に署名が無かったので高安さんが、「日本共産党札幌委員会」と入れたといわれますが、何故署名を入れたのか私には解せないです。

高安—印刷所の場所は多分その通りです。古川さんというお婆さんが、無署名なので入れなくて良いのかと聞くのです。携帯も無い時代だから国治さんと連絡の取りようも無いし、翌朝配る予定なので、しょうがない今までの常識なら署名を入れるので、入れてくださいということをやったのです。

河野—受け取った人にとっては、共産党の犯行声明と思いますよね。

高安—後で考えると入っていてもいなくても意味は同じなんですよ。それでないと、怪文書になりますね。共産党以外にあんなもの書く者はいないですよ。

河野—今さら、どうこうの言ってもしょうないのですが、どんな考えで署名を入れたのでしょうか。この前、中野さんとおしゃべりした時には、中核自衛隊の学生は正義感でやっているから、正しいことをやったと思って入れたのではないかと話し合ったのですが、いかがでしょうか。

高安—ぼくの心の中にもそういう気持ちがあったので、書くことを躊躇しなかったのだと思います。国治さんは年の功で書かない方が良く思っていたのでしょうか。

河野—私など現在から思うには、確かに署名がなくとも共産党がやったと思われるかもしれないが、もし私が同じことをやらされたら、誰が書いたか分からないようにしたほうがいいと思います。

高安—それで、帰ってから国治さんに頭をかきながら、署名が無かったから入れて来たと言っていると、「入れちゃったのか俺は入れないつもりだったんだが、入れたものはしょうがないな」と苦笑して終わりでした。

河野—あのビラの内容が稚拙だと批判する人もいるようですが、私なんかは共産党らしい文章だと見えています。

高安—当時とすればね。国治さんは文才があってああいうことを書かせるとう

まいんです。演説は余りうまくないが、書くのは割りと上手でしたよ。

河野—殺人現場は下宿のそばでしたね。下宿の娘さんが騒ぎ出した時、高安さんはどう思いましたか。

高安—聞いた瞬間、「アア、やったな」と思いました。

河野—その直後、某アジトに集合したようですが。

高安—多分、少し南の門脇の所のような気がします。そこには、村上さんもいて、誰かが連絡に来て何となく緊張した雰囲気になったようなかすかな記憶があります。

河野—さらに、その翌日某アジトに集まり、何となく成功を喜び合うように握手し合ったようです。

高安—それは、大林のいた北学寮です。この日はスキーの訓練予定だったのですが、事件の発生ため中止になったのです。

河野—渡部氏が天誅ビラは2通りあったと指摘しています。これは新しい着眼点だと思います。ほくも調べてみたところ、ビラの見出しが「天誅降る」というのが道立図書館に保存されていることが分かりました。もう一つ「天誅下る」というビラは、当時の地元新聞や追平氏の著書とされる『白鳥事件』の表紙に一部が掲載されているのみで、全文を入手できないでいました。ところが、渡部氏からの情報で写真製版ではあるが、「天誅下る」ビラの全文が、『回想—戦後主要左翼事件』（警察庁警備局）に掲載されていることが分かりました。また、北海道警察本部が編纂した『北海道警察史』には、事件に関する「天誅降る」のビラが写真で掲載されていることも分かりました。

渡部氏が主張するように、どちらか一方が権力側の増し刷りであるかどうかの判断は保留しますが、ビラが2通りあるという氏の着眼には鋭いものがあります。ところで、高安さんは裁判の中で「天誅ビラ」が2通りあることを裁判官から質問された記憶がありますか。

高安—何しろ古い話なので、ぼくには記憶がないのです。でも、もし裁判記録の中にそのようなやりとりがあれば、質問されたのでしょうか。これはぼくの全くの推測ですが、国治さんは古いタイプの人間だから「降る」と「下

る」のどちらの文字を使ったと思うかと聞かれたら、「降る」の方じゃないかという気がします。ただ、権力側が増し刷りしたかどうかなどは、ほくには見当もつきません。

河野—一ついでもう一つお聞きします。天誅ピラは23日あるいはその後に撒かれたわけですが、追平氏の『白鳥事件』などによると、この配布にも中核自衛隊の皆さんも動員されているようですね。

高安—そうです。ほくらも事件の直後にピラ撒きをしました。ほくの記憶では、苗穂の工機部や大きな工場あたりで撒いたように思います。あれには、北大細胞の他の人も動員されていたようです。

### 弾丸をめぐって

河野—あともう一つお聞きしたいのは、先ほどの話の中にもあった事件の前の1月、幌見峠で中核自衛隊が行った射撃訓練のことです。その時の弾丸をめぐって裁判で大論争がありました。

高安—期日ははっきりしないのですが事件の前、中核自衛隊の5人と宍戸もいたように思います。1月の中頃、雪中での訓練なんてものではなく試射でした。一度撃ってみれということをやったのです。

河野—高安さんは、それまでピストルに触ったことは無かったですか。

高安—触ったのは何度かありましたが、撃ったのは初めてでした。ブローニングですからね。ほくが逮捕されてから実地検証に行った場所は間違いないと思うんですが、大体この辺ではないかと探した所から弾が出てきました。弾丸の問題で一番大きいのは、この弾にサビがあるかどうかでした。1年でサビるものかどうか分かりませんが、中国の実験では皆な腐食割れるということになりました。もちろん、そうなら弾丸を埋めたということになります。

河野—私などは松本清張ばりの推理で行くと、高安さんは試射したというが、弾丸は容易に見つからない。それで、苦し紛れに警察側が証拠を捏造するために埋めたのではないかと考えております。

高安—裁判では、捏造した可能性も否定できないということでした。確かにこ

の事件の物証といえば、あの弾丸しかないのです。裁判の過程で弁護側から伝聞証拠だけしかないと批判されましたが、間接証言でもあれだけ状況証拠が揃ってれば、裁判所としては有罪にせざるを得ないと、ぼくなりには解釈します。そうすると、仮に弾丸が捏造されとしても、たいした意味はなくなってしまうのです。

**河野**—私のように、新聞でしか裁判の経過を知らない人間にとっては、検察側の説明が苦しいな思っておりました。

**高安**—裁判が終って冷静になってから、その時の検事は高木さんですから、そのことをよほど聞いて見ようかと思いました。ただ聞いたとしても、やったと言うわけは無いですよ。

高木さんは人間としては立派な方だと思いますが古いタイプの検事ですので、やらないとは言い切れないと思います。弾丸が1年も2年もサビないであるはずは無いというのが、科学的真理だとすればあるいはやったのかなとも思われます。

ぼくが、思い出すのは朴の木の葉っぱを撃ったのです。朴の木の葉は枯れても大きいのです。普通の木を葉を狙って素人が当たるわけではないのです。

**河野**—子供の頃、私の隣の家にも朴の木がありましたが、枯れても大きな葉ですからね。

**高安**—ぼくは、朴の木の葉を狙って撃ったのです。現場検証に行った時、捜している付近に朴の大木を見つけました。風で飛ぶ可能性もありますが、木の葉が落ちそうな範囲で、弾丸を見つけたのです。

### 逮捕、離党、自白

**河野**—白鳥事件発生から逮捕され、脱党して供述するまでの経過を聞かせてください。追平氏の本によると、佐藤博さんは2月の初めに自宅を出て鶴田さんの下宿に移り、その佐藤さんの空いた部屋に高安さんが入ったように書いてありますが、その辺りはどうだったのですか。

**高安**—ヒロさんは村上さんの指示で自分の家を出たのだらうと思います。彼が

家を出る日は聞いていたように思いますが、出る前に留守になったことがありました。たった一晩か二晩ですが、ヒロさんの家に留守番に行ったように思います。家は空っぽ同然で、わずかに布団が残っていたようで、そこに泊まりました。その時、名前は忘れましたが党の基本文献の本を餞別代りにプレゼントした記憶があります。これがヒロさんと会った最後でした。

ほくも下宿の小野さんに長くいたのでまずいと思い、鶴田さんが下宿を変えた時、菊水にあった彼のアパートに移りました。そこへヒロさんが訪ねて来たという人もいますが、その間1ヶ月くらいブランクがあったように思うので、もし訪ねて来たのならほくが移る前だと思います。

その後ほくも地下にもぐりました。7月頃であったか、党の札幌委員会のレポーターを勤めた人が都合悪くなり、その代わりにほくが2ヶ月間くらいレポをやりました。完全に地下にもぐって党の裏の文書の交換をやるのです。街頭レポで文書を受け渡し、記号で記された人に届けるのです。警察に一番狙われる仕事なので、渡す時どこかでカメラに撮られていないか、私服警官が張っていないかと神経をピリピリさせていました。

**河野**—小林多喜二の『党生活者』に出てくる仕事ですね。

**高安**—これを約2ヶ月やりましたが、党から出る給料は微々たるもので、52年の夏頃はパンの耳と水のみで1週間くらい暮らしたものです。

そのうちほくがレポをやっていることが、警官にばれているらしい事が分かり、党に呼ばれて札幌にいては危ないので石狩に廻されました。石狩細胞は農家が一人しかいなく、水田農家なので忙しい時期でした。そんな所で政治宣伝をやってもしょうがないので、戦時中に援農できたえた腕で農家の手伝いをしまして、近所でも評判になりました。それより前に、ほくは札幌委員会の細胞の幹部を集めて火炎ビン作りの講習会をやったことがあり、ほくが軍事の人間だと知られているので、道委員会からさらに遠くに飛ばせと言う指令が出て、12月の暮れに一時的に札幌へ戻って来ました。翌年の1月に入ると急な街頭レポで上川へ行けということになり、上川委員会に行きました。そこで更に、名寄へ行けということになりました。

名寄は、士別町上士別出身の川口（孝夫）さんがいた所です。彼は農家をやめて専従になったのですが、その金でボロ家だけ名寄駅の割と近い所に1軒買ってあり、そこが党の事務所になってました。あそこは、国鉄の労働者も多くて一時は黨員も多かったらしいが、ある幹部が引き回したためかなりの人がやめてしまったらしいのです。

河野—私は士別の出身なので、上士別も知っています。多分私が高校教員で士別にいた時、川口さんの弟さんと思われる方が市議に立候補し、ぼくらが応援した記憶があります。また、私は結婚当時、家内の職場が名寄にあったので一時名寄に住んだこともありました。高安さんは、名寄で逮捕されたのですが、直接の容疑は何だったのでしょうか。

高安—忘れましたが恐らく葉書ですよ。あの頃、多くの逮捕者が出ましたが、ほとんどが脅迫葉書の容疑でした。ちょっとでも筆跡が似ていると引っ張って、じわじわと事件に迫るわけです。

河野—いわゆる別件逮捕というやつですね。

高安—葉書はほとんどの人が出しているので、引っ張りやすかったのです。

河野—ということは、対警宣言は共産党が音頭をとってやったということですね。

高安—まあ、そういうことです。1月に名寄に来て、6月9日に捕まりました。名寄では給料も出なくて、党活動中に新聞やパンフレットを売った金で細々と暮らしておりました。名寄の冬は寒いし大変でしたよ。

河野—ぼくも住んだことがあるので、よく分かります。名寄で逮捕されて札幌へ送られて、そこで検事の取調べを受けるわけですね。

高安—ぼくを担当したのは新任の安部検事でした。最初の1ヶ月くらいは、張り切って完全黙秘でした。黙秘というのは退屈ではあるが意外と簡単なのです。取り調べる人の話を聞き流していれば良いわけですから。

この安倍検事は異色の検事で、東大法学部在学中に学徒出陣で海軍に入り大尉で終戦を迎えて、再度入学して司法試験に受かったのですが、司法組織の中では一番古い体質の刑務官になりたかったのだそうです。もしぼくの担当検事

が、古いタイプの高飛車な態度の検事なら、ぼくはしゃべらなかつたと思います。黙秘を貫くぼくに対し、新任の彼は独り言のように人生論を説きました。「人生にアンチテーゼを持たない人間には発展はない」とか、「生きることに怠惰であってはいけない」などと言うのです。この言葉はぼくにはこたえませんでした。

約1ヶ月くらい経ってから、先ず党を辞める決意をしました。当時の感覚では、党に籍を置いたまましゃべることは出来ないと思いました。結局、事件当時は興奮状態でしたが段々覚めて行って、田舎廻りなどしていると、こんなことで良いのかという批判がぼくの中にも出て来るわけです。ぼくが離党して間もなく彼は、フルブライト交換留学生で渡米し、その後は高木検事が担当しました。

安倍さんは、帰国後東京で法務省直属の検事をやりましたが、検事でありながら検察批判の論文を雑誌に発表したため、函館地検に左遷されました。それでも彼は意気軒昂でしたが、結局弁護士になりました。弁護士になってからも、金にならない冤罪事件や欠陥自動車問題などに取組んだ人で、検察官当時は赤い検事とも言われました。

河野—検事のしゃべる人生論で目を覚まされたのですね。

高安—でも党を辞める決断をすることもさることながら、良い仲間であった中核自衛隊員のことをしゃべらなきゃならないのが辛かった。仲間を裏切ることになりますからね。今になってみると自分の行動は、あんなにも戦争に反対していながら、結局特攻隊と同じようにただ一途で、ものすごく幼稚だったと思います。

### 辛い家族の想い

河野—それから、これは聞かずもがなの質問ですが、高安さんが逮捕され裁判にかけられたことで、家族の方は辛い思いをしたのでしょうか。

高安—やはりそうだと思います。親父やお袋には済まない事をしたと思ってます。余市は田舎だし、ああいう事件に関係したというので、事あるごとに新聞



に載りますからね。でも、親父もお袋もぼくには一言も文句を言いませんでした。親父は坊ちゃん育ちだったが、大正末期のリベラリストで理解はありました。

河野—両親がだまって許してくれたから、そういう運動が出来た面もあるのでしょうね。

高安—釈放されて復学する時は、農学部へ行って犬飼哲夫先生や学部長に頭を下げました。その間、ぼくの親父は授業料も払っていてくれて、ぼくの代わりに休学届けも出してくれてました。だから、戻る時は割と簡単だったです。

河野—復学したのは何年でした。

高安—56年の春でした。犬飼哲夫先生に頭を下げて、教室も暖かく迎え入れてくれました。犬飼先生は事あるごとに太田嘉四夫先生に対し、高安をこんなにしたのはお前の指導が悪いからだど叱るのです。そうではなく、当時の党の組織は職員と学生は完全に分かれており、太田先生は職員細胞に属していて、我々学生を指導する立場ではないのです。だから、ぼくは太田先生から直接指導は受けていないので、責任はないから太田先生を責めないでくださいと話したものです。太田先生は北大では周知の共産党員でしたが、一度もぼくを批判せず接してくれたことを有難く思っております。

## 党への直言

河野—厳しい質問かも知れませんが、高安さんたちは共産党の一員として事件に関係したわけですね。

ところが共産党の公式見解では、党が分裂していた時に他の一派がやったことなので現在の党には関係が無いと言います。高安さんは、現在党に対して言いたいことは何ですか。

高安—それは山ほどあります（笑い）。いずれ、そのことはまとめて公表したいと思います。でも、党は事実上認めてるんですよ。白対協を解散してからは逃げの一手です。当時の分派のやったことで党とは関係ないの一点張りですよ。ああいう言い方を誰も信用する人はいないと思います。

白鳥事件を含む軍事闘争に対して、はっきりした党としての反省なり自己批判は無いですよ。結局闇の中へ葬り去ろうとしています。当時の軍事方針は余りにも大きな問題を引き起こしました。だからそれを否定するのはおかしいのであって、党ははっきりと自己批判すべきなのです。何故そうなったのかという検証無しに、分派がやったことで主流派は知らないということで、いつまでも通そうとしていることが、今の党の抱えている最大の問題だと思います。

河野—その論法で言うと、北海道は当時一方の分派だったわけだから、56年から57年にかけての北海道には共産党は無かったということになりますよね。

高安—そうなんです。そんなバカなことは通用しません。いつまでも曖昧にしたままでは、党の真の出直しになりません。

#### 村手宏光氏をめぐって

河野—村手宏光さんはどういう方だったのでしょうか。

高安—村手は1945年の春、海軍兵学校に入り、半年ほどで敗戦になって48年に北大予科に入学し直しました。彼は普段は無口なのですが、何かでカツとすると良くしゃべり、ほくらよりも血の気が多くてびっくりしたことがあります。

村手は、軍事の事を軽く考えて入って、後になって失敗したと思ったのではないのでしょうか、彼は逮捕されるとすぐにしゃべってしまいました。そのうちに心因性の病気が始まって一時的に釈放されました。その時、恐らく党の工作を受けたらしく、間もなく収監されました。再収監された時には、しゃべるのをやめてしまいました。彼は最初しゃべったことを否定しましたが、その間の心の葛藤が彼の心に大きな傷を与えたようです。逮捕されて間もなく検事の取調べに応じてしゃべってしまい、それを党から否定しろと言われたようです。結局、彼は検事の筋書き通りしゃべらされたと言われ取り消したのです。その後、病状が悪化して札幌医大に入院しました。親父さんは医者で彼のことを随分心配していたようですが、可哀想に彼は10年ほど前に亡くなりました。

## 門脇成氏をめぐって

河野—門脇成さんはどんな方でしたか。

中野—彼はぼくと札幌市立中学の同級生で、1945年春、仙台の陸軍幼年学校へ進み、敗戦により半年ほどで帰郷して、48年に北大予科の最後の学生として入学しました。

高安—門脇はぼくと同時に中核自衛隊員に選ばれ、北大細胞の中ではよく冗談を言い合い、一番仲が良く、ラグビー部に属する明るく快活ないい男でした。

白鳥事件後ともぐっていたようですが52年か3年頃、彼は虫垂炎になつたらしいのです。潜行中ですから人目に着きやすい札幌の病院での手術を避けて、余市の勤医協病院で手術しました。余市はぼくの郷里であること思い出した彼は、病院を抜け出してぼくの家に訪ねて来たようです。ぼくの母は大歓迎で、ご馳走でもてなし彼は嬉しそうに帰ったと聞いております。

彼はその後中国に亡命し、77年暮れに帰国しました。ところが、98年10月に川口孝夫さんが『流されて蜀の国へ』を書いて、白鳥事件は冤罪ではなく概ね高安の供述のようなことがあったと書くと、俄然、ぼくや川口さんの批難が始まり驚きました。事件から数十年も経っているのだから、「いい加減に目を覚ませよ」と言いたくなりますが、彼はぼくのことを裏切り者とか嘘つきだと、ものすごい剣幕で批判しました。

いつでしたか、彼の親父さんが亡くなったのを知って、懐かしくて多分彼も来ているだろうと、彼との再会を願ってお参りに行きましたが、顔を合わせてニヤッと笑ったのを見ただけで言葉も交わず終わり、本当に残念でした。

## 出獄後の村上国治氏との再会

河野—先日の、HBC制作のラジオ番組「インターが聞こえない」を試聴する会の席上で、渡部富哉さんの書いたものの中に、国治さんが網走から出獄した時、現地に高安さんも行ったが会うことが出来なかったとあるが、実態はどうでしたかという質問が出ました。そのことについて、高安さんから補足したいことがあるということなので、お願い致します。

高安—渡部さんが、国治さんの出獄の時ぼくが網走まで行ったが会えなかったと書いてますが、渡部さんが想像で書いたことで、ぼくは行っておりません。

ぼくが、網走へ行ったら皆から吊るし上げられて大変なことになります(笑)。当然のことながらそんな所へ行くはずは無いのです。ぼくが国治さんと会ったのは、国治さんが網走を出て札幌の菊水の勤医協病院で何日間か入院して検査を受けた時です。

その時、北大の太田嘉四夫先生がぼくの所へ連絡をよこして、「国治さんが会いたいと言ってるのでどうする」というのです。「いいですよ、国治さんが会いたいというなら会いましょう」ということで、真駒内の太田先生の家で会いました。多分、国治さんが出て1週間か10日ほど経った頃です。ぼくが国治さんと会って、やった・やらないの論争になったら、ぼくの考えをはっきり言おうと腹を決めてました。国治さんは公判では、ぼくの証言を徹底的に批判してましたから、同じやり方で来るのかと覚悟してました。相手が会いたいと言っているのに逃げるのは卑怯だと思い、「行きます」と答えました。一度、公判ではなく、個人的にも2人の立場をはっきりさせた方が良いと思って、国治さんに会いました。

会ってみたら、国治さんは事件のことなど一言も言いませんでした。昔の事件以外の懐かしかったことを、ああだこうだと約2時間くらい話し合いました。昔の懐かしかったことを愉快地話し合ったのです。

河野—出獄した直後だとすると、ぼくの調べでは69年11月末のことでしょうね。

高安—多分、国治さんはぼくと会ったことが知れたら批判されるのではないかと思って、こっそり会いに来たのだと思います。それは、国治さんと太田先生とぼくの3人しか知らないことです。

河野—国治さんのお姉さんが、高安さんのことを徹底的に本で批判してましたね。

高安—国治さんが出獄したら、高安に徹底的に謝らせると言っていたと書いてるようですね。国治さんは、表面では闘争心を燃やして公判ではぼくを厳しく批判したが、内心とは全然違ったのでしょうかね。

河野—私は事件に関していろんなことを調べてます。白鳥事件は冤罪だと書いた代表は松本清張さんですが、後に推理作家になった佐野洋さんも冤罪説です。彼は白鳥裁判が行われていた頃、読売新聞北海道支社の駆け出し記者で、札幌地裁へ裁判の取材に行っただけなんです。丁度その時、高安さんと村上さんが法廷で対決する場面に出くわしたらしいのです。村上さんは高安さんに向かって、「お前はそんな嘘っぱちを俺の前で言うのか！」とすごい剣幕で追っただけを見て、高安はウソを言っているのではないかと思ったと書いてます。

素人はそういう感性的な判断をしますからね。少なくとも法廷などでは、迫真の演技といえはそれまでですが、彼は怒ったのでしょ。

高安—彼は、自分と党を守る立場だから、それくらい言っても不思議ではないと思います。ぼくは、党を守る立場は否定しませんが、2人だけになったら一切事件の話は無いのです。これをどう解釈するかは皆さんの自由です。

H・I—川口さんの書いた『流されて蜀の国へ』によると、川口さんが帰国して後の74年、東京の武道館で偶然村上さんに会った時、旧知の川口さんに「貴方は誰ですか」みたいな態度で、そそくさとその場を去ったと書いてあります。高安さんに懐かしく話しかけたのとは違いますね。

高安—網走を出た直後と川口さんと出会った時の時間的な経過の問題じゃないかな。その間に彼の中でものすごい変化と葛藤があったはずですよ。ぼくが会ったのは出獄直後で、皆が出てきたと喜んで歓迎してくれて、その中に彼はいるわけですよ。国治さんは自由になって何日も経っていないので、気持ちも嬉しさで昂揚してるんですよ。

その後、いろんなことがあって段々と冷めて行って、川口さんに会ったのです。その間に国治さんの心境も大きく変化したんじゃないですか。党のピエロになっていた自分に気付いてきた。だからまともに川口さんの顔を見られなかったのではないかと、ぼくは想像してます。そう思うと、ぼくは国治さんが可哀想でならないのです。

K・T—でも、出獄直後、何故高安さんに会いたかったのでしょうかね。

高安—あれだけ、公判廷でぼくを批判していたので、覚悟して会ったのですが

まるでそうでなかったのです。

K・T—国治さんの心の中に高安さんに対して申し訳ないという気持ちがあったのでしょね。

高安—申し訳ないとは言えないのです。考えてみればそんなに長い期間ではなかったが、われわれ5人との数ヶ月間の付き合いが人間として懐かしかったんでしょね。わずかな人間的つながりが欲しかったのではないですか。ほくを敵に廻してしまったんですから、敵に会う必要など無いのです。そんなこと党に知れたら大変ですよ。

河野—まだまだお聞きしたいこともあります。この辺でひとまず終りたいと思います。長時間にわたりお話し下さった高安さんに心よりお礼申し上げます。また出席の皆様ご苦勞様でした。

### 白鳥事件と北大関連年表

1950年

国内外と全学連の動き	大学・学生・白鳥事件関連の動き
1・6 コミンフォルム、日本共産党の平和革命路線を批判	
3・22 日本共産党、民主民族戦線提唱	4 - 高安知彦、一浪して余市高校から北大入学
5・2 東北大でイールズ反共講演	5・10 イールズ来学を前に道学連梁田政方委員長、全学連中央の闘争戦術を批判
5・3 マッカーサー共産党の非合法化を示唆	5・15～6 イールズ来学し中央講堂で講演、入学間もない高安はこの闘争に参加し反共演説に憤る
5・5 日本共産党都委員会、東大、早大細胞に解散命令	5・下～6・中旬 北大当局イールズ闘争関係者の実情調査
6・6 マッカーサー日本共産党中央委員追放	6・22 イールズ闘争関係学生に、退学4名、無期停4名など10名を処分
6・25 朝鮮戦争始まる	6・下旬～7・上旬 教養部を中心に処分反対の署名運動やスト決議
7・8 マッカーサー警察予備隊創設指令	7・26 1948年以来認められていた北大細胞の公認取り消し
9・下 道学連・関西学連、全学連中執追放を声明	8・23 伊藤誠哉学長引責辞任
10- 全学連レッド・パージ粉碎スト提起	9 - 高安知彦日本民主青年団に加入、10月頃日本共産党入党
10・31 政令325号（占領目的阻害処罰令）発布	10・12 北大新聞、レッド・パージ候補に杉之原舜一教授ら4名があがっている模様と報道
	11・12 イールズ闘争で無期停の2学生復学決定

1951年

国内外と全学連の動き	大学・学生・白鳥事件関連の動き
1・25 米特使ダレス、講和問題で来日	1・28 道学連自治会代表者会議、全面講和署名運動決定
2・23～27 日本共産党四全協、軍事方針出す	2・17 自治会、職組ら学内諸団体で講和問題懇談会発足
3・7 政府国立大管理法案上程	3・上旬 全面講和署名千五百突破
3・27 米講和条約案を日本政府に手交	3・31 中野徹三、小島正治ら北10条交番で地方公務員法違反で逮捕
4・11 マッカーサー罷免	4・17 北大民主民族戦線主催「州兵派遣反対」、「レーン講師赴任反対」集会で高安知彦ら逮捕、高安は起訴をまぬかれたが北大生2名が起訴、後に高安の証言により無罪
6・8 住民登録法公布	6・下旬 札幌市より構内を縦断する鉄北・桑園道路建設申し入れ
8・12 コミンフォルム、日本共産党四全協（所感派）支持	7・4 全学中央委員会など学内団体は構内道路は研究の妨げ、軍用道路の疑いで反対声明
9・4 サンフランシスコ講和会議開始	9・15 全学中央委員会、苫小牧演習林接收、CIE勧告などに反対決議
9・8 講和条約、日米安保条約調印	10- 高安知彦、農学部農業生物学科へ進む
9・21 全学連単独講和、安保条約に反対して10月ゼネスト提起	10・中旬 村上国治、日本共産党札幌委員長となる
10・16～17 日本共産党五全協、新綱領策定 「民族解放民主革命」路線へ	10・13 進駐軍関連の軍事アルバイトを阻止しようとした田辺良則（全学中央委員長）、中林重祐（道学連書記長）が逮捕、17日農学部学生辛昌錫も逮捕
11・1 ウイーン世界平和評議会	10・14 道学連、全学連中執退陣を要求
11・12 京大に天皇来学、学生が公開質問状を用意、平和を守れの歌で迎える（京大天皇事件）	10・下旬 この頃、北大で鶴田、大林、門脇、高安、村手らで中核自衛隊を組織（事実上の隊長穴戸均、副隊長鶴田倫也）、最初の任務は学内パトロール
	11・中旬 北大文連・自治会で総合原爆展を開催
	11・22 原爆展のパネル3枚が占領政策阻害行為違反で押収
	12・5～19頃、中自隊らが3回にわたり石炭運搬列車を赤ランプで停車させ石炭を拾わせるのに失敗（赤ランプ事件）、この間に朝鮮人高允京を列車から奪還計画もあったが失敗
	12・20 穴戸を隊長とする高安ら5名の北大中自隊と藤井（学大）は千歳の阿宇砂利、祝梅へ、北大生2名ををリーダーとする高校生3名は豊平の常盤部落へ山村工作に出かける
12・26 吉田内閣改造	12・27 札幌市役所で座り込み、北大生2名を含む多数の自由労務者らが逮捕
	12・28 いわゆる山村工作隊は急遽帰札
	12・29～31 中自隊は官憲に対し「人非人」ビラ送付、塩谷検事宅（29日）、高田市長宅（31日）に投石

1952年

国内外と全学連の動き	大学・学生・白鳥事件関連の動き
1・21 白鳥警部射殺される	<p>1・1 北学寮大林居室で、ファッション的警官への実力攻撃協議</p> <p>1・4 「新年に当たり警察官諸君に宣言する」と題する文書発送 この頃より中自隊は白鳥警部の行動調査を行い、村上国治と北大生とで白鳥殺害の謀議があったとされる</p> <p>1・21 事件当夜、高安は下宿の娘さんの話して事件を知り、「あ、やったな」と思った。その後、現場より更に南に住む門脇宅で待機、その時村上国治さんもいたように思う。</p> <p>1・22 ☆大林居室に中自隊が集まり、お互いが成功を暗黙に喜ぶように握手。ここで、村上国治が「天誅ビラ」の原稿を書く、夕方高安が機関紙印刷に校正に行き、「日本共産党札幌委員会」の署名を入れる。 ☆共産党道委員会の村上由、党と関係のない跳ね上がり勝ちにやったことで、党とは無関係と声明</p> <p>1・23 ☆いわゆる「天誅ビラ」が撒かれる ☆村上委員長、前日の発言を否定するかのような声明発表</p>
2・20 東大でポボロ事件起きる	
3・上 全学連拡大中央委で武井昭夫委員長、富田書記長ら5中執を不信任	3・18 武装警官約50名が大学本部で学生鶴田倫也、職員柄内信男をカメラ事件で逮捕（北大事件）、この時村上国治が暴行を働いたとして裁判の起訴項目に追加
4・13 全学連破防法反対4・28、5・1全国ゼネストを提起	4・7 太田嘉四夫講師、白鳥事件の脅迫状送付容疑で逮捕
4・17 破防法国会上程	
4・28 対日平和条約、安保条約発効	4・28 法経スト、文、教育、教養、農で学生大会
5・1 メーデー事件発生	5・1 法、文、教育スト、教養は有志参加、中央講堂で講演会、学生300名メーデー参加
5・5 全学連緊急中執委で5・30ゼネスト決定	5・上旬 教官ら約50名、北大平和の会結成 5・12 道学連メーデー弾圧抗議第3波ゼネスト決定
5・30 全学連全国スト、6・10ゼネストを決定	5・30 法経、文スト、理授業放棄、教養、農、医は任意参加



6・2	交番爆破の菅生事件	5・30	午前学内集会, 引き続き800名デモ, 6・中旬 道学連6大会(中林委員長), 破防法と住民登録法反対決議, 浜口委員長, 中林全学連中執を選出, 6・17 教養(初), 法経, 文, 農スト, 札幌学大と共に千二百名が集会デモ
6・17	労働者第3波スト, 全学連も呼応してスト	6・下旬	7・1実施の住民登録に北学寮など拒否を呼びかけ
6・25	全学連, 住民登録拒否闘争決定	6・29	太田, 栃内休職処分撤回を求め職組ハンスト, 高安ら北大生数名が学友鶴田釈放を求めてハンスト決行
6・下	全学連5回大会, 武井委員長から玉井仁(京大)委員長へ	7・5	恵迪寮で住民登録票を集めていた市職員から寮外生大林昇(法経), 松井晋(理), 本間義男(教養)ら登録用紙を取り上げて逮捕
7・30	日経連, 赤い学生は不採用と声明	7・8	鶴田, 太田保釈される
8・6	全学連日経連声明撤回を決議	7・11	住民票事件の3名に大学当局停学1ヶ月の処分下す
10・1	総選挙で日共全員落選	7・15	小樽, 旭川で火炎瓶事件発生
10・15	保安隊発足	8～以降	白鳥事件関連の逮捕が続く 佐藤直道(8/28), 村上国治(10/1), 石川重夫(10/31)ら
11・下	内灘基地闘争開始		

## 1953年

国内外と全学連の動き	大学・学生・白鳥事件関連の動き		
1・20	米大統領にアイゼンハワー就任	2・1	北大新聞再び大学管理法国会上册かと報道
3・14	吉田内閣バカヤロウ解散	4～	白鳥事件関連逮捕が続く 追平雍嘉(9日), 柴田誠一(18日), 辛昌錫(21日)ら 追平は月寒派出所で安倍治夫検事に「手記」を書き, その後5月末「供述調書」を提出
4・14	全学連自治庁に政治団体の届出, 国政選挙に25名推薦	4・8	村上国治第1回公判(爆発物取締法違反容疑)
4・27	妙義基地(群馬)反対集会開催	6・8	北大新聞, 昨秋から学生運動低調, 現在法経, 文, 医, 理, 農, 教育, 教養に自治会もあるも, 何とか活動しているのは教養のみと報道
5・上旬	浅間基地(長野)集会		
6・中旬	内灘基地(石川)集会		
6・18	自治庁学生選挙権は郷里に置く通達を発す		

7	全学連夏休みに向け帰郷運動提唱	6・9 高安知彦, 道北の名寄で逮捕, 黙秘で頑張るも7月中頃「党籍除名申請書」を書き, その後安倍, 高木一検事らに自供
9・上	全学連3中委, MSA反対, 学園復興会議開催決定, 委員長米田	8・19 高安ら立会いの下, 幌見峠で銃弾一個発見 9・中旬 迪恵寮自治庁通達反対の署名運動開始
10・2	池田・ロバートソン会談	9・18 村手宏光, 長野の自宅で静養中を逮捕 10・23 道学連学生の住所確認調査用紙返上 10・28 中央講堂で選挙権擁護大会, 市中デモ 10・下旬 自治会が市選管と交渉の結果, 事実上選挙権が札幌にあることを認めさせる 10・30 札幌市議会自治庁通達撤回要求を決議
11・12	全学連自治庁通達撤回の12・1ゼネスト指示	
11・29	日本のうたごえ開催	
12・15	選挙制度審, 学生選挙権は現住所でと答申	12・上旬 全日本女子学生会議に中平, 中原, 土田ら参加

(河野民雄作成)